

自らも断水体験／全国の被災地で活動

命を守る授業実現へまい進

広島工業大（広島市佐伯区）3年の竹原凜桜さん（20）は安芸区矢野町が、2018年の西日本豪雨で被災した経験や、各地の被災地を回った学びを生かし、生徒の命を守る教員を目指している。「自分の記憶や知見を伝え、一人一人が身を守る方法を見つけられるようにしたい」と夢を語る。

（政綱宜規）



西日本豪雨で土砂崩れが起きた自宅近くで、防災教育への決意を新たにす竹原さん

広島工大の竹原さん「明るく準備、避難伝える」

西日本豪雨 8年

竹原さんは県内の大学生でつくるボランティア団体「晴」の代表を務める。3月に東日本大震災の被災地を視察した際、メンバー9人と宮城県内の被災した元小学校の校舎を訪れ、娘を亡くした語り部と交流。「災害の多くは想定外のこと起きる。津波が迫り、校内放送も使えない中でも子どもを逃がす方法を考えなければ」と学びを深めた。

防災に関心を持ったのは中学1年生だった8年前。西日本豪雨で自宅が断水し、給水所まで山道を数百回往復する生活を約2週間余儀なくされ

た。「下の弟は乳児でミルクを作るのも苦労した。もしもの備えが必要」と痛感し、大学の防災士の養成講座で学び、1年時に資格を取った。

級友に勉強を教えた経験から高校の理科の教員を志す。環境学部の授業の傍ら、教職課程に

取り組み、能登半島地震で被災した石川県にも通った。「被災地の人は大変な中でも前を向いていたいし、自分もそう。深刻な顔で活動するのは違うと思う」。県内の防災イベントでは、子どもと明るく会話しながら、日頃からできる準備や災害時

の逃げ方を伝えている。今後、宮城県の視察の学びを学内で発表し、教職課程の授業でも取り上げる予定だ。「何でもやってみるのが大事。いろんな経験を積んで慕われる先生になり、その上で防災も理科も教えたい」と意気込む。